

ファーガス・マカフリーは、日本人写真家  
石内都の個展を開催いたします。

## 石内都 展

2019年9月5日～10月19日

オープニングレセプション：2019年 9月5日 午後6時～8時

この度ファーガス・マカフリーニューヨークは「石内都」展を開催いたします。作家の40年以上にわたる制作活動から著名な5つのシリーズ、また未発表作品を含む70以上の作品を展示します。また本展をもちまして弊廊は、石内都の作品取り扱いを開始いたします。今回、作家自身が2フロアの会場スペースの内装、ならびに壁の色を設計します。石内にとって、本展は2015年アメリカ・ロサンゼルスでのJ・ポール・ゲティ美術館での回顧展以来の大規模なギャラリーでの個展となります。



石内の作品は、彼女が独学で得た技術により、語られることのなかった歴史や抑圧された感情の声を引き出し、被写体に崇高さと威信を与えることによって、人間の普遍的な弱さを露わにします。作品は限りある時間を生きる我々に力強く語りかけてきます。石内は1947年、東京から約95キロ北西に位置する群馬県桐生市で生まれました。その後1945年8月以降アメリカ海軍が駐留する基地の港町となっていた神奈川県横須賀市に、1953年一家で移り住みます。その町は石内に、アメリカによる占領と、それにより日本文化が忘れ去られていくという現実を突き付けた場所でした。1966年には実家を出て多摩美術大学に進学、そこで染織を学び、また1960年代に活発だった学生運動に参加しました。



1970年代半ば、石内はNikonの35ミリカメラ、28ミリレンズで写真を撮り始めます。愛用のカメラは今も変わっていません。1976年10月から1977年3月の間、「絶唱、横須賀ストーリー」シリーズの制作に取り掛かります。幼少期の故郷を撮影した本シリーズでは、まるで脱走路や罠が仕掛けられた空間を彷彿とさせる、ノーファインダー（カメラのファインダーを覗かずに撮影する方法）で撮影された街の風景や薄暗く照らされる階段が捉えられ、作家自身が感じる不安と、街中の慌ただしい動きが迫るように伝わってきます。

1979年「絶唱、横須賀ストーリー」は木村伊兵衛賞を受賞しました。その後「From Yokosuka:Third Position」「Tokyo Bay City」の2作のシリーズを完成させた1990年まで石内はモノクロームの横須賀の写真を撮り続けました。これら2つのシリーズは1980年代まで定期的に東京で発表されました。「From Yokosuka: Third Position」では、「絶唱、横須賀ストーリー」でも見られた銀塩写真特有の黒い荒々しい粒子のトーンが引き継がれつつ、子供の頃決して近寄ってはいけないと教えられていた横須賀のドブ坂通りの作品が加えられ、荒廃していく古い建物の壁や玄関口、廃墟となった銭湯や売春家の看板などが捉えられています。1983年石内は雑誌「カメラ毎日」からの依頼で「Tokyo Bay City」シリーズに着手、東京湾を撮り始めます。数十年にわたり占領下にあった横須賀に対する自身の避けられない不安感が、彼女の視点で一つ一つの作品に反映されています。

石内作品の特徴とも言える肌理が粗くコントラストの強いモノクロ写真はデビュー当初からの彼女のスタイルでした。石内はテクスチャの物理的な存在感を強化するように、広範囲のトーンとコントラストを使いこなすネガフィルムを現像します。独学で習得した現像作業はアトリエで行われます。非常に大きな印画紙のロールペーパーを用いる暗室での作業は、粒子の物理的な存在感とイメージの鮮やかなコントラストを際立たせます。このような現像プロセスと印画紙の化学的特徴は光の屈折を起こさせ、19世紀中期の銀塩写真のような風合いが生み出されます。手作業で行われる彼女独自のプロセスは、一つ一つの作品をユニークなものにしています。



「Scars」シリーズ（1991年～）は、傷を負った身体の一部を撮影し、それぞれの原因とその年が記されています。痛々しいはずの傷跡からは、柔らかな親近感と繊細さが感じとれます。「Scars #19 (illness 1964)」(1995年/1998年)では皮膚に刻まれるくぼみを写し、その傷は被写体である女性の体、そして彼女の人生の小さな一部であるということを、親しみを込めて認識させます。

石内は人生で追った傷の撮影を通して不完全さを肯定し、そっと寄り添うように被写体に近づきます。傷痕への関心は女性の傷を撮った「Innocence」シリーズ（1994年～）でも続きます。「Innocence #9」（2007年）で写される女性はカメラに背を向けて立ち、肩から下が露わになっています。他の作品とは対比的に、このシリーズではコントラストは最小限に抑えられ、傷跡が皮膚に馴染んでいくように写し出されています。石内は何らかの形でそれぞれの人生に影響を与えたであろう傷を、彼女たちの生きる活力を表すものとして捉えているのです。

2000年、石内は自身の母の写真を撮り始めます。間もなくして母は他界しますが、彼女と向き合うように遺品の撮影を続けました。花柄の地模様が入った下着、古風なシュミーズ、日常で使っていた香水など、着古され、すり減り、また減衰した物の中にある美しさを愛でながら、もっとも個人的と言える遺品の数々を母の家のリビング・



ルームに差し込む自然光の下、撮影していきました。この「Mother's」シリーズ（2000年～2005年）は、当初モノクロ写真として始まりましたが、カラー写真に移行していき、それにより物に宿る、今は亡き人との親密性をより強く感じるイメージが生み出されました。本シリーズは、2005年の第51回ヴェネツィア・ビエンナーレ、日本パヴィリオンで発表され、その後、2006年に東京都写真美術館、2007年にオーストラリア・シドニーのニュー・サウス・ウェルズ州立美術館にて展示されました。



彼女の他者への共感に満ちた作品制作から石内は2007年、原爆被害者の遺品撮影のプロジェクトの委託を受けることとなります。広島平和博物館に寄贈された遺品の中から石内は、原爆が投下された1945年8月6日広島の住民が着用していた手縫いの衣類を選びました。被害者に代わり声を発し、使い古された遺品の中にある美しさと人間性を引き出しています。「ひろしま / hiroshima」（2007年～）は戦争や被爆という政治的な意味合いよりもまず、遺品に込められた個人的な感情や思い出を呼び起こします。「ひろしま / hiroshima #75 Donor: Harada, A.」（2007年 / 2008年）はほぼ実物と同じ大きさに現像された、指の部分が黒ずみ、わずかに焦げたレースの白い手袋の写真作品です。遺品は主に実際の大きさに合わせ様々なサイズで現像され、それぞれの品が強いられた状況を見るものに思い起こさせることで、等身大で私たちに語りかけ、そして問いかけてきます。「ひろしま / hiroshima」シリーズは現在も進行中で、本展覧会では多数の作品が展示されます。

過去に愛用された日用品への関心は、フリーダ・カーロの遺品撮影のプロジェクトへと繋がっていきます。撮影は2012年、メキシコシティのブルーハウスで行われました。石内はこの依頼を受けて2つのシリーズを発表しました。最初のシリーズ「Frida by Ishiuchi」からは彼女の日々の奮闘が感じ取れ、もう一つのシリーズ「Frida Love and Pain」は隠れた装備具などに焦点を当てています。慎ましやかなテワナドレスや5つの金と銀の指輪はフリーダのオアハカ人としてのルーツと、母系のテワンテペックとサポテカ文化のへ強い精神的な繋がりを明らかにします。「Frida Love and Pain #10」（2010年）に写る青いリボンがついた緑色の靴は左右非対称な彼女の歩行を支えるために右側だけが高くなっており、ロングスカートの下に隠された思春期の傷が写し出されています。



これらのイメージは想像力をかきたて、作家の被写体の人生に対する深い共感を伝えます。石内は物の撮影を通し、その背後に隠れている人間を写し出そうとしています。時代を超えた普遍的な人間性、失われた存在に対する深い想いを湛える石内作品を、本展にて是非ご高覧ください。

## 作家について

石内都（1947年生まれ）は1970年代から写真家として活動しています。2005年にはヴェネチア・ビエンナーレに日本代表として参加。2014年には日本人として3人目となるハッセルブラッド国際写真賞を受賞。ロサンゼルス/J・ポール・ゲティ美術館（2015年～2016年）、横浜美術館（2017年～2018年）など日本国内外20以上の美術館で個展を開催。また、映画監督のリンダ・ホーグランドのドキュメンタリー「Anpo」（2010年）や「遺されたもの Things left behind」（2013年）の中で取り上げられました。現在石内の作品は、J・ポール・ゲティ美術館（ロサンゼルス）、サンフランシスコ近代美術館、ヒューストン美術館（テキサス）、国際写真センター美術館（ニューヨーク）、ハーシュホーン美術館（ワシントンDC）、東京都写真美術館、テート・モダン（ロンドン）等に所蔵されています。1979年から著名な出版社、自主出版を含む数多くの写真集を出版をしています。群馬県桐生市在住。

## ファーガス・マカフリー

ファーガス・マカフリーは2006年の設立以来、24以上のアメリカ、ヨーロッパ、日本の著名な戦後および現代美術作家を紹介し、多角的なプログラミングを展開しています。戦後日本美術や欧米の作家たちの国際的な評価を確立させるうえで中心的な役割を担ってきました。ファーガス・マカフリーはニューヨーク、東京、サン・バルテルミー島（カリブ海）にスペースがございます。

## プレスのお問い合わせ:

Tel: +1-212-988-2200

Email: [press@fergusmccaffrey.com](mailto:press@fergusmccaffrey.com)

## Images:

1. Ishiuchi Miyako, *From Yokosuka*, 1981. Gelatin silver print, 41 1/8 x 60 7/8 inches (104.5 x 154.7 cm) © Ishiuchi Miyako
2. Ishiuchi Miyako, *From Yokosuka Third Position*, c. 1981. Gelatin silver print, 42 1/4 x 31 3/8 inches (107.6 x 79.7 cm) © Ishiuchi Miyako
3. Ishiuchi Miyako, *Scars #19 (illness 1964)*, 1995/1998. Gelatin silver print, 29 1/8 x 42 1/2 inches (74 x 108 cm) © Ishiuchi Miyako
4. Ishiuchi Miyako, *Mother's #37*, 2001/2006. Chromogenic print, 7 1/2 x 11 1/4 inches (19 x 28.5 cm) © Ishiuchi Miyako
5. Ishiuchi Miyako, *ひろしま/hiroshima #75* Donor: Harada, A., 2007/2008. Chromogenic print, 13 1/8 x 9 inches (33.5 x 23 cm) © Ishiuchi Miyako
6. Ishiuchi Miyako, *Frida Love and Pain #10*, 2012. Chromogenic print, 44 1/4 x 30 inches (112.5 x 76.2 cm) © Ishiuchi Miyako